

2022 年 2 月 23 日

2021 年度聖路加国際大学大学院看護学研究科 修士論文

新人看護師が臨床現場を生き抜くプロセス
-修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いた質的研究 -

The Survival Process of Newly Graduated Nurses in Their First Year of Clinical
Practice : A Qualitative Study Using Modified Grounded Theory Approach

20MN001
相吉はるな

要旨

【目的】

新人看護師が臨床現場で生き抜くプロセスを就業後1年間に焦点を当てて明らかにすることである。

【方法】

研究デザインは、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（以下、M-GTA）を用いた質的研究である。研究対象者は、4年制看護系大学を卒業した一般病棟勤務の臨床経験3～4年目のプリセプター役割やそれに準ずる教育的役割を現在担っている（または、経験のある）看護師であることを条件とし、看護系大学入学前に社会人経験のある者、男性は除外した。データ収集は、半構造化面接を実施し、分析はM-GTA（木下, 2020）に準拠して行った。なお本研究は、聖路加国際大学研究倫理審査委員会の承認を受けて実施した（承認番号：21-A-019）

【結果】

研究対象者は12名で、面接時間は平均63分であった。分析の結果、31個の概念が生成され、7つのサブカテゴリーおよび、中心的（コア）カテゴリー《大変だけど明日も行く》とカテゴリー＜立ち行かぬ現実と向き合う＞が生成された。

新人看護師の生き抜くプロセスでは、新人看護師は【行くだけで緊張】な毎日を起点とした【焦燥する日々】の中で、【図り知れぬ先輩の意図】に翻弄されながらも、【助けてくれる人の存在】によって、何とか日常を保っていた。この日々の中で、新人看護師は（頼る本当の意義）や患者の（安楽を疎かにしたツケ）を目の当たりにし、＜立ち行かぬ現実と向き合う＞という転換点に至っていた。この＜立ち行かぬ現実と向き合う＞という転換点は、新人看護師に【先輩の真意を知る】ことや、【整理した上で行動する】局面をもたらすが、【やはり容易には行かない】という日々が何度も繰り返されていた。しかしこれら3者の行きつ戻りつの日常は、同時に新人看護師の経験の幅に広がりが生じることを意味し、その広がりの中で（先輩との意思疎通の瞬間）や（やりがいを感じる関わり）といった、今まで体験することのなかった些細な喜びや、ポジティブな発見に触れていた。そして、これらの日常は、新人看護師にとっての《大変だけど明日も行く》ことへの負担を少しずつ小さくしていった。つまり、新人看護師は《大変だけど明日も行く》日々を続けることで、生き抜いていき、臨床での日々が新人看護師の当然の日常となっていくのであった。

【結論】

新人看護師が臨床現場を生き抜くには、先輩との関係性を構築しながら、《大変だけど明日も行く》ことが重要であることが示された。そのため看護基礎教育においては患者との援助的対人関係のみならず、先輩看護師を含めた上司との対人関係能力の基盤となる力を強化することが重要であると考えられる。また本プロセスは、新人看護師が肯定的な変化に転じる転換点が含まれており、本プロセスを提示することで、看護学生の予期社会化の促進及び新人教育役割を担う看護師の準備性の向上が期待される。